「文楽関係の地　加古川」

“文楽”という芸能をご存知でしょうか？現在は、ユネスコの無形文化遺産に登録されて知名度は高くなっています。日本が世界に誇る舞台芸能の一つです。太夫・三味線・人形遣いの三業が一体となることによりこの芸能は成り立っていますが、江戸時代初期に、西宮神社や淡路島を本拠として演じられていた人形芝居と、京都の浄瑠璃が結びついて人形浄瑠璃が形成されできあがったものといわれています。淡路島出身の植村文楽軒が大坂に文楽座という園芸小屋を建て、興行を始めて以降“文楽”と呼ばれるようになりました。2012 年 7 月、淡路南あわじ市に淡路人形座会館がグランドオープンし、毎日上演されています。
文楽人形と淡路人形の違いも興味深いものがありますので、鑑賞する機会があれば、じっくりご覧ください。

さて、加古川には文楽に貢献した二人の人物がいます。一人が三味線名人の二代目豊澤團平、もう一人が「文楽の研究」の劇評家の三宅周太郎です。

豊澤團平は、文政 10（1827）年に寺家町の醤油醸造業の家に生まれ、本名は加古仁兵衛といいました。天保 11（1840）年、13 歳の時には早くも舞台にあがり、４年後には二代目豊澤團平を襲名しています。後に、紋下（文楽座で最高の地位）になりました。

現在、寺家町商店街の南側の常徳寺門前に菩提所の墓標が立っています。このような文化的な人物が傑出された加古川の地を誇りに思いませんか。

ぶらり加古川第 19 号

平成 28 年 1 月